



イイケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 534 回 オリンピックは豪華絢爛たる、貴族のパーティである！

2013.7.21

僕のスーツの襟には、「東京 2020 オリンピック」招致の PR 用バッジがついている。安倍晋三首相と同じなのは、唯一これだけである、と威張ってみたが、何とすることはなく、東京都スポーツ振興局招致推進部で、無料で配っている(数に限りがある)。誰もが熱望し、狂喜乱舞するオリンピック、招致バッジをつけているくせに、文句言う筋合いは全くないのだが、何か、どうもしっくりしない。なんでだろうか…屁理屈を書いてみた。

オリンピック開催地の決定をめぐる IOC 委員の横暴さと周囲をはばかりめ接待攻勢。オリンピックの正式競技決定は、わずか数人で密室の中で論議され、各国の事情は考慮せず、レスリングがオリンピックの正式競技から外されかかっている背景は「ロビー活動をしなかった」と公然と述べるあの連中は、まるで平民を見下した貴族の茶話会と同じ、時代錯誤も甚だしい。IOC(国際オリンピック委員会)委員とは、何様のつもりなのか？

IOC は国際的な組織とはいえ、ヨーロッパの貴族が中心で、親睦団体の色彩が強く、IOC 委員たちは自分たちのことを「ファミリー」と呼んでいる。

国際的な巨額な資金を動かすスポーツ団体だが、組織としては巨大なる任意団体。従って、組織の一員は公務員でもなければ、民間の株式会社でもないゆえに、一国の法的な規制を受けることはない。

IOC 委員は各国の代表ではなく、IOC が国や地域に委員を派遣しているという考え方でスタートした経緯は、委員会自身が委員を選ぶという、閉ざされた運営を永らく採用していたことから、「**貴族的国際性**」の現れであり、「**特権階級的なクラブ組織**」とすることができる。私自身、長野オリンピックの時、長野県の委託で「宿泊業のサービス向上指導」をやっていたが、IOC の無理難題に四苦八苦していた状況を垣間見た思いがある。

オリンピック開催地の決定をめぐる IOC 委員に対する「裏金」疑惑も、「法人」ではなく「任意団体」であるかぎり、法的規制は不可能。

不利となれば、競技ルールの変更もやり放題、莫大な放送権料、選定賄賂も、問われるのは組織と委員個人の「倫理」であり、自浄能力ということになる。IOC の理事が、貴族社会の中で世襲されているという事実をみれば、自浄努力は期待できるはずがない。

元々オリンピックは貴族のスポーツの祭典、車夫馬丁の参加はなかった。無理やり参加したとしても、貴族に勝てるはずがない。貴族の子弟は、自己の地位を世襲すべき直系男子の体力を鍛えるためにも、武術以外に何かが必要とされた。「**ありとあらゆるスポーツは王侯貴族の遊びから始まっている**」という、古今東西の永遠なる論拠は、ここに起因する。そういえばオリンピックの提唱者、クーベルタンもフランスの「男爵」という貴族である。

オリンピックは、純朴なスポーツという名を借りた、ヨーロッパの王侯貴族たちが4年毎に開く、「**豪華絢爛パーティ**」である…とは、ひねくれ過ぎた、戯言(たわごと)だろうか？